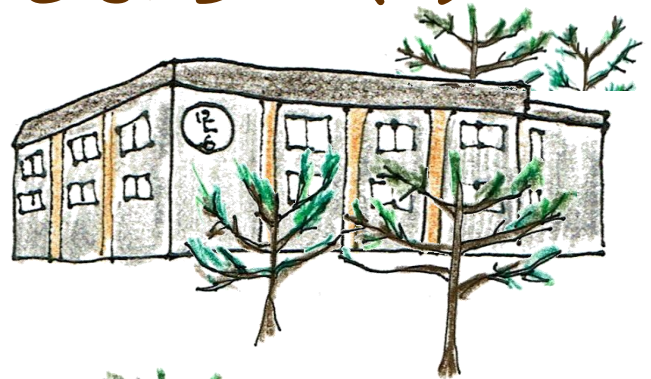


# ふるさとつくり

## 里山と循環するまちづくり

- ✚ 鹿背山の歴史 P2  
～千三百年にわたる多彩な歴史
- ✚ 鹿背山の自然 P5  
～豊かな生物多様性との付き合い
- ✚ 里山とまちの生物多様性 P9  
～里山の豊かさと恵みをどう活かすか
- ✚ 里山活動の紹介 P11  
～里山を手入れし活かし楽しむ
- ✚ 里山と循環するまちづくり P15  
～里山の恵みでふるさと文化をつくろう
- ✚ 里山的ライフスタイル P17  
～ニュータウンで楽しむ自給自足生活



かせやま  
鹿背山元気プロジェクト

## 鹿背山元気プロジェクトの里山活動

鹿背山（かせやま）元気プロジェクトは、地元の鹿背山と京都・奈良・大阪の森林ボランティアが、木津川市やUR都市機構の支援のもとに集まった任意団体です。

2006年7月に里山再生ワークショップを行い、8月から茂り過ぎて人が入れなくなった山の手入れを始めました。

枯れた木を伐ったり、通れなかった道が開けたり、風や光が入って明るい広場ができたりして、景色が大きく変わりました。次世代の木々が育ち始め、鳥や虫がやって来て、種や花粉を運び、生物多様性が高まります。

伐った木を薪にしてピザを焼いたり、地元のアーティストと美術や音楽のイベントをしたり、自然観察会を開催したり、「森のようちえん」を試行したりと里山の様々な恵み（生態系サービス）を引き出す活動をしてきました。

また、この10年で近隣のニュータウンも成長してきました。（梅美台・州見台・城山台の計画人口は約3万人です。）

## 鹿背山と城山台のまちづくり

今後の10年を考えると、初期のメンバーはいよいよ高齢化し、世代交代が課題となります。

鹿背山の歴史や自然の豊かさ（生物多様性）、里山活動の楽しさ、里山の恵み（生態系サービス）を日々の暮らしに活かす工夫についてお伝えして、新しいアイデアが生まれればいいなと思い、この冊子をつくりました。

「ふるさとつくろう」を合言葉に、城山台小学校の子どもたちが里山の自然を学んで、里山の植物や土を校庭に移植する「里山プロジェクト」も始まり、地域、学校、行政、環境団体が集まる協議会も準備中です。

里山とニュータウンの好循環が、子や孫の時代に、緑豊かな価値ある「ふるさと」を生み出すことを願っています。

2017年3月 鹿背山元気プロジェクト

この冊子についてのご意見・お問合せは  
kanosato2013@gmail.com（中村）まで

上から、木津川、鹿背山区、城山台（ニュータウン）、その右がゴルフ場（グーグルマップ提供）

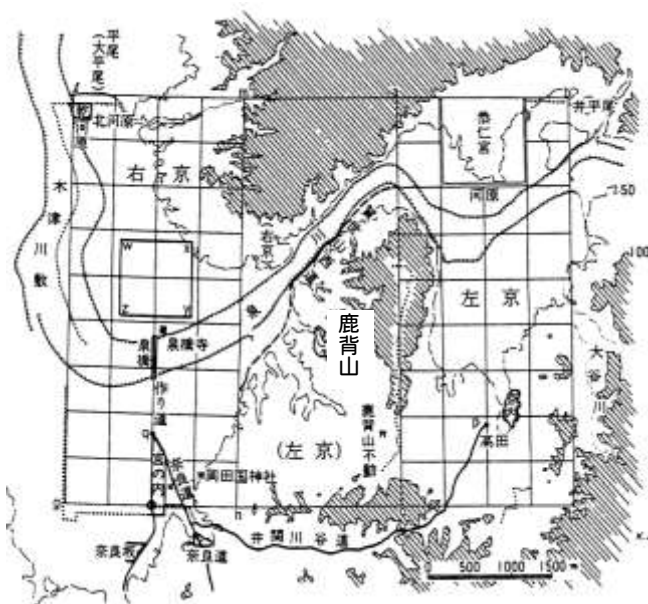


# 1. 鹿背山の歴史 千三百年にわたる多彩な歴史

## 恭仁京と鹿背山

鹿背山の歴史は古く、奈良時代にさかのぼります。「続日本紀」には、賀世山（かせやま）西道の東を恭仁京の左京、西を右京としたとの記述があります。恭仁京は天平 12 年（740）から 3 年間の短命な都で、僅かな資料から推測するしかありませんが、泉川（木津川）をはさみ鹿背山を中心とした都市計画であったという説があります。（足利健亮 1985、下図も）

万葉集には「みもろつく鹿背山の際（ま）に 咲く花の 色めづらしく 百鳥の声なつかしく」と、恭仁京を懐かしむ歌があります。「みもろつく」とは、「その山に神を祭る」という意味で、鹿背山と三輪山の枕詞となっています。恭仁京の人々は鹿背山を「神のおられる山」として意識しました。



恭仁宮跡から鹿背山を眺める。

## 行基と鹿背山

また、鹿背山には奈良時代の僧、行基にまつわる不思議な伝説もあります。

行基は関西地方を中心に寺院、ため池、橋、温泉をつくる活動をし、東大寺・大仏の造営にも協力したと言われます。

ある時行基は山を出て高瀬の里へ行かれ、道で3頭の鹿を背負った狩人に会われた。行基は「あなたの持っている鹿を私に与えてくれないか」と言った。狩人は「もし食べることができれば、この鹿をあなたに与えましょう」。行基は、「与えてくれば私は食べます」。狩人は試しに鹿を与えた。行基はたちまちのうちに3頭の鹿を食べた。狩人が驚いていると、行基は前の川の流れて口をすすいだ。するとたちまちにして、先に食べた3頭の鹿を吐き出した。鹿は生き返って走り去った。狩人は驚き、比丘（びく＝僧）は凡人でないと殺生の罪を改め、仏道に入った。これよりこの川を鹿口川といい、寺を鹿山寺と呼ぶようになった。

「リポート 鹿背山」（木津中学校郷土史倶楽部、1981）から



鹿背山には多くの石仏がおられます。

## 江戸時代の里山管理

鹿背山の里山は、木津郷の9つの村が共同で管理をしていました。そのことが9つの村を結び付けていたとも言えます。江戸時代初期には土砂の流出を防ぐための「留め山」（山林の伐採を禁じた山）でしたが、山年貢の納入や2万本あまりの松（アカマツ）の管理を条件に、下枝や下草を取ることが許され、谷ごとに各村の持ち場が決められ、それぞれが管理・利用していたということです。

このような「みんなで支える里山」のあり様は、現代の里山再生活動のお手本になるのではないのでしょうか。（「木津町の歴史」参照）

## 鹿背山焼

鹿背山では、奈良時代に平城京の瓦を焼いた遺跡（鹿背山瓦窯跡）が発掘されました。

江戸時代の後期には、山で採れる良質の陶土から「鹿背山焼」と呼ばれる陶磁器が作られ、木津川を船で大阪まで運んで売られていました。茶碗、水指、花生け、急須、燈籠などに動植物や人物などの文様が絵付けされています。



良質な鹿背山の土は大和五条村（奈良市）に運ばれて、赤膚焼の原料にもなりました。ある古老には、牛の引く荷車に乗せられて奈良の五条まで土を運んだ子ども時代の思い出があります。古老は捨てられた不良品の皿を持ち帰りました。その裏には「昭和14年3月五新鉄道起工式記念」と刻まれています。五条と和歌山の新宮を結ぶはずが中断となった幻の鉄道です。



## 大仏鉄道

1898年（明治31）から1907年のわずか9年の間、奈良と加茂をつなぐ大仏鉄道がありました。城山台には「赤橋」「梶ヶ谷隧道」などの鉄道遺産が保存されています。



- ① モニュメント
- ② ランプ小屋
- ③ 機関車の展示
- ④ 観音寺橋脚 A
- ⑤ 観音寺橋脚 B
- ⑥ 鹿背山橋台
- ⑦ レールの橋
- ⑧ 梶ヶ谷隧道
- ⑨ 赤橋
- ⑩ 井関川隧道跡
- ⑪ 井関川築堤跡
- ⑫ 松谷川隧道
- ⑬ 鹿川隧道
- ⑭ 黒髪山トンネル跡
- ⑮ 鴻ノ池橋台の基礎
- ⑯ 大仏駅跡記念公園
- ⑰ 佐保川鉄橋跡



## ニュータウン開発と里山の荒廃

上の空中写真は 1948 年（国土地理院提供）、下の写真は 2016 年（グーグル提供) のものです。この約 70 年の間、鹿背山の里山にどんな変化があったのでしょうか？

まず、ゴルフ場やニュータウン開発で地表を覆う緑が無くなり、入り組んだ尾根と谷の地形が平坦になりました。その結果、生きものすみかが失われ、地表が乾燥化し、風が吹き抜ける道が閉ざされました。緑を再生するまちづくりが望まれます。

一方で開発されなかった里山も、山奥の棚田が放棄され、木々が茂り過ぎて閉ざされて暗い森になり、生きものが住みにくくなっています。

2つの生物多様性の危機。すなわち「開発による種の減少（第1の危機）」と「放置による里山の劣化（第2の危機）」が同時進行しています。

開発中止によって残された鹿背山の里山（木津北地区）は貴重な緑ですが、人間が利用し手入れをしなければ、里山本来の豊かな自然は失われます。

- 1961年、ゴルフ場がオープン。
- 1987年、関西学研都市開発が国の事業となる。
- 1997年、木津南地区（梅美台・州見台）まちびらき。
- 2003年、木津北地区（鹿背山の里山）の開発事業中止。
- 2012年、木津中央地区（城山台）まちびらき  
木津北地区の里山保全の方針が決まる。
- 2014年、UR都市機構が所有する木津北地区の土地を木津川市に寄贈。城山台小学校開校。
- 2016年、京都大学附属農場オープン。

### 引用・参考資料

- 『日本古代都市研究』足利健亮,1985。
- 『木津川市観光ガイド』ホームページ。



## 2. 鹿背山の自然 豊かな生物多様性との付き合い

### 生きものと、森と、人のつながり

鹿背山では永年にわたり、丘陵地の植物や地形をうまく活かした農業や山の資源活用が行われてきたことで、多様性のある自然環境が出来上がりました。そこには昆虫類や鳥類をはじめとする多くの生き物が生息しています。

自然観察をするには、もってこいの場所ですが、スズメバチやマムシ等もすんでいますのでご注意ください。

自然観察会では、季節毎にたくさんのいきものを目にする事が出来ます。

- 鳥類：オオタカ、アオゲラ、キビタキ、カワラヒワ、シジュウカラ、エナガ、ホトトギス、ルリビタキなど（25種類以上）。
  - 昆虫類：ルリタテハ、ヒオドシチョウ、クロヒカゲ、テングチョウ、ウラギンシジミなどの蝶類（18種以上）。ニホンカワトンボ、オオアオイトトンボ、キイロサナエ、コオニヤンマ、ムカシヤンマ、オニヤンマ、アキアカネなどのトンボ類（10種類以上）。ゲンジボタル、ヘイケボタル、オオオバボタル、マドボタル属、ノコギリクワガタ、アオマダラタマムシ、キイロトラカミキリ、ニワハンミョウ、コツブゲンゴロウなどのコウチュウ類（20種類以上）など。
- その他、ニホンイノシシ、ホンドキツネ、イタチなどの哺乳類も生息しています。



### 四季の森の変化

ドングリころころ、何の実？

森には、コナラやクヌギの木がたくさんあります。これらはブナ科の樹木の仲間です。その果実（み）を「ドングリ」と呼んでいます。難しい言葉では硬いので堅果（けんか）と言われます。

これらの木は、シイタケ栽培のほだ木や薪（まき）など、生活のために貴重な資源となります。樹々の幹から出る樹液には、カブトムシやクワガタムシ、ルリタテハ、サトキマダラヒカゲ、スズメバチなどたくさんの昆虫類が集まってきます。

秋になると落ちてくる実（ドングリ）もシカ、イノシシ、リス、ネズミ類などの哺乳類、カケスをはじめとする野鳥など森に棲む多くの生き物にとって大切な食料となります。

コナラやクヌギの実（ドングリ）は、あくが強いので粉にしてからなんでも水にさらなければ食べることが出来ませんが、常緑のスダジイ、ツブラジイ、マテバシイの実（ドングリ）は生でも食べることができます。粉にすれば香ばしくおいしくクッキーが作れます。

鹿背山には、どんな種類のドングリがあるか探してみてください。



## 松枯れとマツノザイセンチュウ

森を見るとたくさんの松の木が枯れているのに気付きます。これは「松枯れ（マツガレ）」という病気です。

松枯れは、北米原産外来種「マツノザイセンチュウ」が在来種「マツノマダラカミキリ」（写真下）の体の中に入り、カミキリムシが若い枝をかじる時に、カミキリムシの体の中（気門という呼吸する穴）から線虫（せんちゅう）が出てきて、枝のかみ傷からマツの体の中に入ってしまう。マツの体の中に入った線虫がどんどん増えてしまうと、幹の中を流れている水が止まり、木を枯らしてしまいます。

そうするとカミキリムシが松に卵を産むことができるようになります。元気なマツに卵を産んでも、卵が松ヤニに巻かれて死んでしまいます。つまりカミキリムシとザイセンチュウは、互いに助け合っているとと言えます。日本には在来種のニセマツノザイセンチュウが分布していますがほとんど病原性を持たず、病気を起こすことはできないと言われています。外来種のザイセンチュウが日本に来るまでは、マツノマダラカミキリは珍しい種でしたが、松枯れが増えるにつれ一般的な種となりました。マツノザイセンチュウによって枯れた木を伐ると切り口に黒いシミのような模様が出来ています。



## ナラ枯れってなんだ？

森を歩くと茶色に葉が枯れたまま枝についているコナラやクヌギの木を目にします。枯れて落ちた太い枝も目立ちます。これらは、「ナラ枯れ（ナラガレ）」という病気です。

「ナラ枯れ」とは、ナラ類やシイ・カシ類などの樹幹に小さな甲虫の仲間・カシノナガクイムシ（写真上）が潜入し、クイムシの体についているナラ菌を樹体に感染させ、菌が増殖することで、水を吸い上げる機能を阻害して枯死させる病虫害です。ナラ枯れにかかった樹々は、夏でも紅葉の様に赤茶色に葉が変色し、幹には小さな穴が多数あき（写真下）、根元には白い粉のようなものが目立ちます。

大きな木が被害にあうと、落枝や倒木による危険性が高くなります。雨後や強風時には、太い枝が突然落ちてきます。森を歩く時は特に気をつけてください。



## 森の中に出来た不思議な空間「ギャップ」

強風などによって大きな枝が折れたり、病気や寿命などによる枯死で大木が倒れたりして、森の中にぽっかりとあいた空間・場所を「ギャップ」と呼びます。英語では「割れ目とか隙間、欠落」などを意味します。

森林が十分発達し、極相林(きょくそうりん)と呼ばれる段階になると、森(群落)全体で植物の種類や構造が安定し大きく変化しなくなります。しかし、ギャップができると林床(りんしょう＝森林の地表面)に陽光が当たり土中に長く埋もれていた多くの草木や他所から風や野生動物によって運ばれて来た草木の種子が発芽し、次の世代を担う樹木が生長を開始します。

ギャップが出来た場所には、早い時期にアカメガシワ、クサギ、ヌルデ、ヤマウルシ、カラスザンショウ、コシアブラ、タカノツメ、スミレ類などの多種の草木類が姿を現し、やがてもとあった樹木類の苗が現れます。それらの葉を食べ、花の蜜を求めて来る多くの蝶・蛾類やハチ類、枯れ木を求めてカミキリムシなどの甲虫類など多種の昆虫類がきます。そして昆虫類を食べる他種の昆虫やクモ類、鳥類もやってきます。森の中で起こるギャップは大切な森の新陳代謝・世代交代です。

近年、里山の木々を薪や肥料として利用しなくなり、うっそうとした暗い森となり、新陳代謝が滞っています。

古くから人が関わり、さまざまな森の産物を得ながら・育て、維持し守られてきた里山では、人為的に伐採(間伐)などを行うことでギャップを生み出し、多様性のある環境をよみがえらせることも大切です。

森のギャップには、たくさんの生き物も集まりますが、森を活用する人にとっても使いやすい場所となります。

鹿背山元気プロジェクトでは、道づくり、あそび場・果樹園・菜園づくりや里山イベントで、ギャップの整備と維持を行っています。





### フィールドサインを読み解け！

森には、鳥やイタチやタヌキやイノシシなどたくさんの動物が住んでいます。

動物達が残した生活の跡（糞、足跡、羽、餌を食べた跡など）を「フィールドサイン」と呼び、動物達はその場所で何をしていたかを読み取ることが出来ます。森に残されたヒントを元に、謎解きも楽しい森歩きになります。以下は鹿背山で見つけたフィールドサインです。

#### ○イタチの糞

開けた場所、石の上、切り株や丸太の上など目立つところに細く黒いよろっとしたものがあればそれは「イタチの糞」です。



#### ○シカやイノシシのお風呂

森の谷間や水が溜まる場所には、イノシシの泥風呂（ぬた場）があります。

体につくダニなど寄生虫を取り除くために泥の上でころげ回ります。お風呂に入った後は・・・皆さんが濡れた体をタオルで拭くようにします。でもイノシシはタオルを使いません、かわりに体を木の幹にこすりつけます。

もし皆さんが森の中で低い位置に泥のついた木の幹を見つけたら、それはイノシシが体をふいた跡です。地面から60cm以上の高い位置に泥がついていたら、それはニホンジカが体を拭いた跡です。



#### ○タヌキの糞

タヌキは、道沿いや林のなかに糞を一箇所にたためてする習性があります。「タヌキの溜め糞」と呼ばれる彼らのトイレです。よく見ると糞には木や草の種もたくさん入っています。



#### ○鳥の巣や羽

地面に散らばる鳥の羽や、木についている巣を見つけることがあります。特に散らばる鳥の羽は、そこで何か事件でも起こったようです。オオタカが小鳥を狩った痕かも知れません。



### 3. 里山とまちの生物多様性 里山の豊かさと恵みをどう活かすか

#### 生物多様性とは

生物多様性 (biodiversity) とは、生きものたちの豊かな個性とつながりのこと。地球上の生きものは 40 億年の歴史の中で、さまざまな環境に適応して進化し、3,000 万種の生きものが生まれました。

これらの生命は一つひとつに個性があり、支えあって生きています。これが生物多様性で、次の 3 つのレベルに分類されます。

##### ■生態系の多様性

森林、里地里山、河川、湿原、干潟、サンゴ礁などいろいろなタイプの自然があります。

##### ■種の多様性

動植物から細菌などの微生物にいたるまで、いろいろな生きものがいます。

##### ■遺伝子の多様性

同じ種でも異なる遺伝子を持つことにより、形や模様、生態などに多様な個性があります。



#### 生物多様性の危機

日本の生物多様性は 4 つの危機にさらされています。過去にも自然現象などの影響により大量絶滅が起きていますが、現在は第 6 の大量絶滅と呼ばれています。人間活動による影響が主な要因で、地球上の種の絶滅のスピードは自然状態の約 100~1,000 倍にも達し、たくさんの生きものたちが危機に瀕しています。

##### ■第 1 の危機

乱獲・過剰な採取や埋め立てなどの開発によって生息環境が悪化し、破壊されます。

##### ■第 2 の危機

里地里山などの手入れ不足による自然の劣化。

里山林や草場が利用されなくなると、生態系のバランスが崩れます。

##### ■第 3 の危機

外来種などの持ち込みで、在来種を捕食されたり、生息場所を奪われたり、同種内で交雑したりします。

##### ■第 4 の危機

地球温暖化で、動植物の 20~30% の絶滅リスクが高まるといわれています。

「第 2 の危機」は里山活動にとって重要なキーワードです。つい 50 年ほど前まで日本の農村では、山の木を伐って薪や柴を集めて、家庭の燃料にし、落ち葉や腐葉土は田畑に運ばれて有機肥料になりました。この資源採集が里山の手入れとなり、適度に低密度で明るい雑木林、生きものがすみやすい環境が維持されました。

ところが便利なプロパンガスや化学肥料が広まると、里山の資源は使われなくなり、しだいに林が高密度で暗くなり、何百年もの間、人の手によって維持されてきた生物多様性が失われるようになります。

里山再生活動で木を伐って明るい林をつくるのはこのためです。左の写真は伐採地に飛んできたルリビタキです。

#### 生態系サービスとは

生態系が人類に与える恵みを表し、尊重するために「生態系サービス」という概念が生まれました。それは次の 4 つに分類されます。

##### ■供給サービス

食料、水、燃料や原材料（繊維など）、遺伝子資源、薬用・生化学資源、観賞用資源の供給。

##### ■調整サービス

大気や都市環境の質の調整、気候の調整、局地災害の緩和、土壌浸食の抑制、地力維持・栄養循環、花粉媒介、病害虫抑制など。

##### ■生息・生息地サービス

生息・生育環境の提供、遺伝子的多様性の維持。

## ■文化的サービス

自然景観、レクリエーションや観光、文化のインスピレーション、芸術とデザイン、神秘体験、科学や教育に関するサービス。

### みもろつく鹿背山再生プラン

生物多様性が深刻な危機にあるため、環境省のリードで「生物多様性地域連携促進法」が策定されました。(2011年施行)

木津川市は同法に基づいて、ニュータウン開発が中止となった木津北地区を対象に「みもろつく鹿背山再生プラン」(地域連携保全活動計画、2014年)を策定し、鹿背山元気プロジェクトなどの活動団体はプランを実施する「木津川市地域連携保全活動応援団」を立ち上げ、作業道を整備する共同作業、市民の皆さんを対象とした「里山学校」のサポート、整備計画の話し合いを行っています。



### 里山再生活動と生態系サービス

鹿背山元気プロジェクトは里山の生物多様性を考え、生態系サービスを引き出す活動を行っています。

長年手入れをしなかった雑木林を間伐・伐採して、光や風が入り、生きものが行き交う明るい林や果樹園や菜園に再生します。(生息・生息地サービス)

アカマツ林は松枯れ病により年々減少していますが、これを食い止めるために枯れ松を伐採・焼却してマツノマダラカミキリの幼虫を駆除します。(調整サービス)

伐採した木は薪ストーブ、キャンプ、陶芸、国、木工に活用しています。(供給サービス)

また、散策路となる尾根では大きくなりすぎたコナラなどがナラ枯れ病で枯れています。倒木や枝の落下が事故につながるので、伐採を進めています。(調整/文化的サービス)

以上のように10年かかって拠点的なエリア約1.0ヘクタールを手入れし、外縁的なエリア約10ヘクタールの再生に道筋をつけました。

市民の皆さんに、鹿背山の里山の魅力や楽しさを知っていただくために、パンフレットや絵本をつくり、自然観察会や里山の自然を描くアートワークショップ、その作品を活用した里山芸術祭、子育てイベントなどを開催・支援しています。(文化的サービス)

2016年からは、城山台小学校が提案した「城山台里山プロジェクト」に参加しています。これは里山の苗木や種や土をまちに移植して、時間をかけて、開発前の里山の自然を取り戻し、緑豊かなまちをつくるプロジェクトです。

こどもたちが里山を観察し、生きものが棲む環境を考え、校庭に「里山の庭」をつくりました。(生息・生息地/文化的サービス)

里山から移植された木々が野鳥を呼び、野鳥が木々の種を運び、まちに里山の緑が広がるという循環を目指しています。

里山の生態系サービスをまちに持ち込むことが、自然とふれあう生きがいきづくりとなり、緑豊かなまちづくりとなり、里山の手入れ(生物多様性の向上)も進むという「里山とまちの好循環」が生まれます。

#### 参考・参照

「みんなで学ぶ、みんなで守る生物多様性」(環境省)  
<http://www.biodic.go.jp/biodiversity/about/>  
「みもろつく鹿背山再生プラン」(木津川市)  
<http://www.city.kizugawa.lg.jp/index.cfm/10,11003,47,html>



## 4. 里山活動の紹介 里山を手入れし活かし楽しむ

里山再生活動は自然の恵み（生態系サービス）を引き出しつつ、永年放置された里山の手入れをして生物多様性を高める、人間と自然の共生を目指す活動です。

鹿背山元気プロジェクトで行われる様々な活動をご紹介します。

### 明るく楽しい森づくり

広場づくり道づくりで、茂りすぎた木々を伐採しました。陽がさしこみ地表の温度が上がり、生きものの活動が活発な「ギャップ」が生まれました。「里山」という言葉を広めた森林生態学の四手井綱英（しでい・つなひで）先生はこれを「日溜まり（ひだまり）」と呼びました。

人間の手で生物多様性を高めるような森林の手入れが、里山活動の基本です。暗かった森が、人間にとっても他の生きものにとっても、快適な明るい森に生まれ変わります。



里山学校で子どもたちと丸太運びをしました。



雑木林を伐り拓いて活動拠点を整備しました。整備前（左）と整備後（右）。



尾根道のナラ枯れを伐採しました。整備前（左）と整備後（右）。右の石を「玉ねぎ岩」と名付けました。



### 里山 70 年間の変化を見る（活動拠点周辺）

1946 年の空中写真（国土地理院提供）では谷の奥（右側）まで棚田や柿畑がつくられている様子が分かりますが、2008 年（同）では、

手入れされず木が茂り過ぎた林になっています。

2009 年ころから、活動拠点（ベースキャンプ）づくりが本格的に始まり、明るい林間広場が生まれ、柿畑が再生されました。



国土地理院提供



国土地理院提供



グーグルマップ提供

木津川市子どもエコクラブサポーターの会に鹿背山での活動をレポートしてもらいました。

### 年間を通じて自然観察の機会を創出

鹿背山は自然がいっぱい。子どもたちが五感をフルに活用し、里山を身近に感じ、自然からいろいろな発見、感動を持ち帰る場所にもなっています。

鹿背山元気プロジェクトのフィールドでは、様々な自然観察会がいろいろな団体とコラボして実施されています。

例えば、木津川市子どもエコクラブは 10 年以上前から、夏・秋・冬の年 3 回、鹿背山元気プロジェクトのフィールドでセミの抜け殻調査やドングリなど木の観察、野鳥観察、生き物観察など行い、生き物との出会いを楽しんでいます。



自然の中での発見はいつも新鮮！

子どもエコクラブは、自然観察だけではなく、伐採木を薪にして窯でのピザ作り、大鍋での料理体験と、里山の資源活用も行います。里山林整備作業のお手伝いにも参加しています。



自然の中での調理は人気のメニュー

### 自然を感じる心を小さい時から育てる

2016 年度からは里山アートワークショップで、自然を感じたことを絵に描いたりするプログラムも始まりました。また、「森のようちえん」のフィールドとして月 1 回、子育てママ net の親子も訪れるようになり、幼児期から里山の自然を体いっぱい感じています。その他、キノコ観察、土の観察などいろいろな「テーマ」での観察会も始まっています。



キノコ観察会では 20 種類以上を発見

子ども達が安心して里山の自然に触れることができるのは、保全作業を定期的にして下さる鹿背山元気プロジェクトのステキなおじさま・おばさまの支えがあってこそ。里山を訪れる子ども達も、ただ鹿背山の自然に気付く機会だけでなく、今後は里山作業を体験する機会も少しずつ増やし、自然との共生についても考える場にしていきます。



活動の後はふりかえりのため感想を記録

鹿背山元気プロジェクトは地元の方から柿畑をお借りして手入れをしたり、柿畑跡を果樹園に再生したりする活動も行っています。

### 柿の手入れをする川本さんのお話

地元の方にお借りした柿畑（富有柿・西村早生）の手入れ始めて丸7年になります。当初は50本位、3年目から150本位を管理しています。毎年1月上旬の剪定から始まり、苔取り・肥料入れ・下草刈り・摘果・下草刈り（途中数回の消毒）と秋の収穫を迎える迄結構忙しい。本で学んだり、周囲のプロの栽培を見たり聞いたり、仲間達と意見交換しながら楽しく作業しています。昼食時は小屋で仲間達とミニ宴会・・・

私は現役時代は電機メーカーの営業マン、農業系には無縁、しかし縁あってたずさわり、今ではすっかりはまっています。木は古木で永年に亘り病害虫が巣くっていて、一筋縄ではいかず、出来不出来の差が激しく、苦戦の連続ですが「あばたもえくぼ」で自分で育てたものは可愛い。

不作の年は宮沢賢治や石川啄木のような心境になる時もあり、落ち込みます。しかし育てる喜びは何物にも代えがたく正に労働の原点かとも思うこの頃です。

柿の剪定と収穫



耕作放棄地の笹を刈り、日かげになる木を伐ります。



落葉を集めて腐葉土をつくります。



将来イメージを描きます



伐採したコナラでシイタケを栽培します。

子どもたちと記念植樹をしました。



## 5. 里山と循環するまちづくり 里山の恵みでふるさと文化をつくろう

里山をニュータウンのまちづくりやふるさとの文化づくりに活かす活動もはじまりました。

### 城山台里山プロジェクト

#### 城山台小学校「エコだより」(平成29年1月)

里山の木を移植して、城山台を里山化する活動を行っています。12月にはシンポジウムを開き地域の方々にもご参加いただいて街の将来と自然保護について意見交換を行い、学校の斜面にドングリを植えました。

これらの活動を保護者・地域の皆さまと一緒に進め、地域をつなぎたい、まちの成長とともにドングリも大きく成長してほしいと願っています。(一部変更しました。)

里山の落ち葉や土を校庭に運びます。



スギを伐採して池の橋をつくります。



校庭に「里山の庭」が完成して、橋の渡り初めをしました。



授業で里山の生きものが住める環境を探しました。



小学校でシンポジウム。(森本幸裕先生の講演。)



校庭の環境づくりを考えて、話し合いました。



校庭の池に里山の木を移植しました。



朝礼でプロジェクトの成果発表をしました。





## 里山絵本「鹿背山ものがたり」づくり

こどもたちが夏と冬の自然を大きな絵に描きました。



こどもたちの絵をまとめて絵本をつくりました。



## 里山アート

里山の粘土で陶芸をしたり、ワークショップでつくった作品の芸術祭を開いたりしました。



## ニュータウンの森づくり

梅美台の施設(きつづ光科学館ふおとん)の裏山は、高さ50cmの苗木を1.25m間隔で植えた人工の森です。20年でこのような森になりました。(京都大学名誉教授・吉田博宣先生監修)



## 6. 里山的ライフスタイル ニュータウンで楽しむ自給自足生活

NHK テレビ講師・ガーデニング研究家の畑明宏さんに里山的ライフスタイルを教えてくださいましょう。

### 私の住まい

私は現在 49 歳。5 人家族です。近鉄高の原駅から徒歩圏の平城・相楽ニュータウンに、15 年前から住んでいます。そして、自宅から自転車で 10 分の所に 400 坪の田畑を借り、自給自足の生活をしています。自給自足



するならばは田舎へ住まいを移して、といった考えをお持ちの方も多いと思いますが、ニュータウンでも十分可能です。また、別に脱サラしなくても出来てしまう事なのです。

実は私は、2 年前まで大手住宅メーカーの技術社員でしたが、今の場所で仕事と週末農業を 10 年以上両立させていました。ニュータウンの周りには、元々あった集落や田畑がまだ残っている場合が多いです。ですから私のように、地元の方々と信頼関係を築けば、その出身者でなくともこのような生活を始めることは、さほどハードルの高い話ではないと思います。ここニュータウンならば、自給生活をしつつ都市の利便性をも十分享受出来ると思います。

### 私が自給自足を始めたきっかけ

1995 年阪神大震災が起こった時、私は社会人になって 5 年目。お金と物さえあれば豊かになれると思っていた私にとって、兵庫県西宮市の JR 甲子園口近くの実家が全壊したのは、予期せぬ出来事でした。幸い家族にけがもなくその晩は、家族全員カーポートの下で暖を取りながら夕飯を食べました。コンビニで、それしか手に入れることの出来なかったおにぎりを。ところがこの状況下で、臨月の義姉を含め皆が笑

っているではありませんか。

この先は不透明にせよ命があり、明日の命をつなぐ食（命）がありさえすれば、私たちは幸せな気持ちでいられるのだ、と気が付いたのでした。考えてみれば、食の自立は人間以外の生き物達は、当たり前で確立しているのです。

ひょっとしたら私にもできるのではと、マンションのベランダでのプランターネギ栽培から始まり、やがて小さな畑を借り、とにかく今できることをモットーに継続し実践をかさねました。そして、ここ 10 年ほどは、自給自足生活をするまでに至りました。当初は食の自立をめざして始めたことが、気が付くと、精神の自立も確立しつつあると自認しています。



自給用の田畑

## 自給自足のための田畑

私が京都府精華町に借りている田畑は、全部で400坪あります。水田が300坪、野菜畑が100坪です。家族5人ならこれで十分です。野菜は多品種少量生産です。多い時には50～60種類の野菜を作っています。無農薬有機栽培をしているので、虫食いだらけです。でも、生命力が溢れた野菜を家族で食べているという自負は、誰にも引けを取りません。

ところで、私の田畑は野菜が負けない程度に雑草も残すので、いろいろな生き物が暮らしています。子ども達は農作業の合間にバッタやカマキリを捕ったり、土手のクヌギの木でカブトムシやクワガタを探しています。

お米づくりに関しては、全て人力で行っています。田植え機、コンバイン、米の乾燥機すら持っていません。脱穀はどうしているかというと、ネットオークションで購入した昭和初期に作られた足踏み脱穀機を大切に使っています。

農機具は一切持たなくても、自給自足は何かなるものです。農機具なしなので、燃料も排気ガスも無縁な、かなりエコな農作業です。ただし、畔や土手の草刈りは大変なので、草刈り機だけは使っています。



田んぼで遊ぶ子ども達

## 私の自宅の庭

前述の400坪の田畑以外にも、自宅の庭にはミニ菜園があります。日常よく使う細ネギやパセリはミニ菜園に一年中育てています。必要な時に必要な量だけすぐに収穫して食べるためです。これならマンションのベランダでも実践可能です。また家庭果樹も苗木から育てています。苗木で育てるとその土地に順応しやすく、病害虫にも強い果樹に育つので、私は苗木植栽をすすめしています。



自宅の菜園

我が家の庭にある果樹は、レモン、ユズ、柿、梅、ブルーベリー、ジューンベリー、ミニリンゴなどです。苗木を植栽してから4～5年目で立派に実が付きます。冬にはバードフィーダー（エサ台）やバードバス（水場）を庭に設けると、野鳥のシジュウカラやメジロなどがやってきます。春にエサ台を撤去すると、野鳥たちは果樹や庭木に発生する害虫を食べるようになります。このように野鳥を味方につけると、庭で害虫に悩まされることなく無農薬管理が実現できるのです。

### 【畑明宏/はたあきひろ】

1967年生。1991年積水ハウス㈱入社。2014年同社退社。人と人、人と自然の繋がりを大切に、毎日を丁寧に暮らすことを提案する『庭暮らし研究所』を主宰。NHKテレビ「ぐるっと関西おひるまえ」に毎月出演。著書に「現役サラリーマンの自給自足大作戦～菜園力で暮らしが変わる～」(家の光協会)が翻訳され台湾で発刊される。



百年のふるさとをつくろう  
千年のものがたりを受け継ごう

三諸（みもろ）つく

鹿背山のまに

咲く花の色めずらしく

百鳥（ももとり）の

声なつかしき

ありが欲し

住みよき里の

荒るらく惜しも

（万景集）

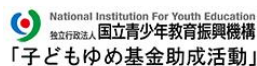


表紙イラスト 福田 藍

かせやま  
2017年3月 鹿背山元気プロジェクト

連絡先：kanosato2013@gmail.com ブログ：http://kaseyama.blog.so-net.ne.jp/

2016年度、鹿背山元気プロジェクトは、林野庁の森林・山村多面的機能発揮対策交付金で里山林保全整備と自然観察会を、京都府地域力再生プロジェクト支援事業と子どもゆめ基金でアートワークショップを実施し、夏原グラント助成金で絵本づくりを行いました。



この冊子は、京都府地域力再生プロジェクト支援事業交付金を受けて作成しました。